

インド密教とマンダラ

大正大学講師・真言宗豊山派南蔵院住職
野口圭也

第5回 「マンダラ」ということば(3)

I. 『大日経』の註釈におけるマンダラの語義解釈

1. 『大日経』の註釈書

『大日経』に限らず、仏教において「経」とはブッダのことばです。したがって、聖典として最高の権威を持ちます。「経」の内容が、説かれているそのままに私たちに理解できれば問題はないのですが、なかなかそうは行きません。そこで「経」に対する「註釈(または「注釈」)」が作られました。これはブッダの弟子に連なる人間が著した文献です。仏教の歴史のなかで、多数の「経」に対する、膨大な数の「註釈」が作られてきました。『大日経』にも、漢文とチベット語訳で残る註釈書が存在しています。

中国で作られ、日本の密教でも重用されているのが、『大日経疏(大毘盧遮那成 仏神變加持経疏)』です。善無畏・一行という『大日経』漢訳コンビによって作られました。善無畏の講義を一行が筆受したもの、と伝えられています。「単なる注釈書ではなく、大日経を中国仏教の立場から理解し、再組織したもの(佐和隆 研編『密教辞典』p.476)」と言われている通り、当時の中国仏教の最高のエキスパートであった一行自身の思想に基づく経典解釈がかなり含まれていると、私は考えています。マンダラに関しては胎蔵マンダラの説明のときに詳しく述べますが、ひとことで言うと、一行が依拠していた大乘仏教の立場からのマンダラ解釈が見られる、ということです。

またインド人の密教学者が著した註釈として、8～9世紀に活躍した学匠であるブッダグフヤ(Buddhaguhya, SaGs rgyas gsaG ba)による註釈が二本あります。長い註釈と短い註釈とがあるので、長い方を『広釈(毘盧遮那現等覺神變加持大タントラ註釈)』、短い方を『略釈(毘盧遮那現等覺タントラ撰義)』と言っています。どちらもサンスクリット原典は残っておらず、チベット語訳のみで伝えられています。『略釈』が経典全体の要点をまとめたものであるのに対し、『広釈』は極めて詳細な註釈です。

これらの註釈においては、経典本文のことばを取り上げて、ことばの意味や、説かれている意図などについて、詳しく考察して論じています。むしろ、著者の自分勝手な解釈を述べているのではなく、それまでの教理の展開の歴史を踏まえ、他の経典に説かれていることなどを参考にして、註釈者が最も適切と考えている経典解釈を挙げているわけです。

『大日経疏』は『大日経』を漢訳した善無畏と、当時の中国仏教界ナンバーワンの学識を持つと言ってよい一行による註釈ですから、極めて高い権威を持つものと言えます。空海が重んじたことにより、真言宗においても伝統的に教えの根幹に置かれてきました。

『広釈』も、もう一つの重要経典である『金剛頂経』の註釈も著述した、8～9世紀のインド密教を代表する学匠の一人であるブッダグフヤによるものですから、これもまた最高級に近い権威を持っています。したがって両註釈の記述は、『大日経』の内容を正確に理解するために欠かすことのできない資料です。

では以下に、両註釈で、マンダラの語義について、どのように説明しているかを見てみましょう。いずれも前回取り上げた、マンダラの語義を説く『大日経』本文に対する註釈の部分です。文中に太字で表しているのが、『大日経』の本文です。

2. 『大日経疏』におけるマンダラの語義解釈

まず『大日経疏』では次の通りです（大正大蔵経vol. 39, 625a21-b11）。

又漫茶羅は是れ輪圓の義なり。（中略）次に義を答うる中に、梵音の漫茶羅は、是れ乳酪を攪揺して蘇を成すの義なり。漫茶羅とは、是れ蘇の中に極めて精醇なる者の、浮び聚りて上に在る義なり。彼の精醇なるものは、また変易せざるによりてまた名づけて堅とす。淨妙の味のみ共に和合して、余物の雑ること能わざる所なり。故に聚集の義あり。是の故に仏は、「極無比味、無過上味を説きて漫茶羅となす」と言う。三種の秘密方便を以て、衆生の仏性の乳を攪揺して、乃至、五味を経歴して妙覺の醍醐を成じ、醇淨融妙にしてまた増すべからず。一切の金剛智印は同共に集會して、真常不變の甘露味の中に於いて最も第一たり。是れを漫茶羅の義とす。

前回に見た通り、「maNDa」に基づいて「maNDala」を説明していることが、「サンスクリット語のマンダラということばは、牛乳を袋に入れて揺さぶって練乳を作るという意味である。マンダラというのは、練乳の中でも極めてよく精製された濃厚な成分が、牛乳の上に浮かんで集まったものなのである（梵音の漫茶羅は、是れ乳酪を攪揺して蘇を成すの義なり。漫茶羅とは、是れ蘇の中に極めて精醇なる者の、浮び聚りて上に在る義なり）。」という説明から大変よく分かります。牛乳から蘇（＝酥 練乳のこと）を作り、さらにその中の最もすぐれた成分が凝集し、混ざり物が無い状態になったものがマンダラ（これは本当はマンダですが）である、と説明しています。

3. 『大日経広釈』におけるマンダラの語義解釈

また『大日経広釈』（再治本、チベット大蔵経北京版 No. 3490）では次のように説かれています（Cu 56b4-6, 56b8-57a1）。

「**"dkyil"** とは『精髓（ニンポ sJiG po）』であり、**"khor"** とは『充滿した（ゾクパ rdzogs pa）』である」と〔經典本文に言うの〕は、〔**"maNDa = dkyil"** とは〕バターのエッセンスや梅檀のエッセンスのようなものであり、最高の、あるいは最上のもの、という意味である。そのバターや梅檀のエッセンスの中には、最高でなく、また完全でもないものもあり得るので、それらと同じようにかと言うならば、「〔バターや梅檀の〕エッセンスのようであるとしても、それらとは異なって、〔エッセンスが〕充滿している」と説いている。「充滿している」とは、満ちていて充足している、という意味である。〈中略〉無上の悟りを現等覺し、退転することなく成就したお方その人が、過去の請願（本願）の勢力によって、身などの無尽の莊嚴の輪であるこのマンダラを加持するがゆえに、このマンダラは精髓（エッセンス）に満たされている、と言うのである。

これもまた、「maNDa」から「maNDala」を説明しており、『大日経疏』との共通性が見られます。ただ、喩えが微妙に違います。『大日経広釈』では、「精髓が充滿している」と説く經典の本文は、バターや梅檀（おそらく白檀の油だと思われます）の、混ざり物のない純粋なエッセンスがマンダであり、それが満ちて充足しているのである、と述べています。白檀はサンスクリット語で「チャンダナ candana」と言い、その音を写したのが梅檀です。乳製品や香料という、インドの生活文化を代表する要素を喩えとして挙げています。

牛乳からバターを作ったり、梅檀の油を精製する場合、現代のような機械ではなく、手作業で行えば、100パーセント純粋に製造するのはなかなか大変であったと思われます。しかしマンダとはそのような純粋な成分であり、それが満ちているのがマンダラである、と述べているわけです。

II. マンダラということばについてのまとめ

これまで三回にわたって「マンダラ」ということばについて、^{るる}縷々述べてきました。少しややこしくなりましたので、ここでまとめておきましょう。

- ①「曼荼羅」ということばは、サンスクリット語の"maNDala" の音を写したことば（音写語）で、漢字の意味は関係ない。
- ②「曼荼羅」の他にも、「曼陀羅」「漫荼羅」「曼拏羅」といった音写語があるが、読みはどれも「マンダラ」。
- ③ サンスクリット語 "maNDala" の意味は、「丸いもの」「円」「球」。
- ④ 漢訳で意識すると、「輪円」「壇」などと訳される。
- ⑤ チベット語訳では「キンコル(dkyil 'khor)」。「キル(dkyil)」は、単独では「中心」「底」、「コル'khor」は「輪」または「円」を意味する。「キンコル」という語全体で「円・球体・円盤」「マンダラ」の意味となる。
- ⑥ 「マンダ」と「ラ」に分解し、「マンダ」は本質、「ラ」は所有を表すので、「マンダラ」とは「本質を有するもの」の意味である、との説明がしばしば見られる。これは教理的語源解釈と言うべきもので、サンスクリットの文法上は正確ではない。しかし以下の⑨～⑫に見られるように、全く根拠のない解釈というわけでもない。
- ⑦ サンスクリットの "maNDa" は、「米を炊いたときなどの浮きかす・ミルクの薄皮・泡・精粹(エッセンス)」を意味する。「凝縮精製物」「成分が最も凝縮されたもの」という意味で、「精髓」「心髄」あたりの訳語ならば可能。
- ⑧ サンスクリットの "-la" には、「所有を意味する接尾辞」という意味はない。ただし"-ra" にはその意味があり、味を表す単語などで用いられている。
- ⑨ 日本における最重要のマンダラの一つである胎蔵マンダラを説く『大日経』の漢訳では、マンダラの語を「比べるものの無いほどの極めてすばらしい味〔を持つもの〕、これ以上は無味〔を持つもの〕である。このため、マンダラと説くのである（極無比味、^{ごくむひみ}無過上味なり。この故に説いて漫荼羅となす[大正大蔵経 vol.18,5b28]）」と説明する。「味」に喩えるのは、「マンダ+ラ」を意識してのことであろう。
- ⑩ 同じく『大日経』のチベット語訳では、「"dkyil" とは『精髓(ニンポ sJiG po)』であり、"khor" とは『充滿した(ゾクパ rdzogs pa)』である。それ意外に精髓となるものは他にないので、『マンダラ(dkyil 'khor)』と言うのである。[服部融泰校訂『藏文大日経』p.55, ll.6-7]」と説いている。これもまた「マンダ+ラ」に基づいた解釈と言える。
- ⑪ 上に見たように、『大日経』の註釈でも「マンダ+ラ」に基づいて解釈している。中国で成立した『大日経疏』では次のように説いている。

サンスクリット語のマンダラということばは、牛乳を袋に入れて揺さぶって練乳を作るという意味である。マンダラというのは、練乳の中でも極めてよく精製された濃厚な成分が、牛乳の上に浮かんで集まっていることなのである。
- ⑫ チベット語訳でのみ残る、ブツダグフヤによる註釈書『広釈』でも同様である。

["maNDa" とは] バターのエッセンスや梅檀のエッセンスのようなものであり、最高の、あるいは最上のもの、という意味である。「[バターや梅檀の] エッセンスのようであるとしても、それらとは異なって、[エッセンスが] 充滿している」と説いているのである。
- ⑬ このように『大日経』とその註釈では、マンダラとは「純粹成分100パーセント」の、「最高の味」のものである、という解釈がなされていた。